

発達心理学概論[特論] 【第12講】

テキスト第VI章後半

想像力の発達

—ディスコースの成立と語りの意義—

内田 伸子

(お茶の水女子大学)

uchida.nobuko@ocha.ac.jp



No.3

想像力の発達
—物語ることの意義—

(3)物語の創造

物語る営み

経験を思い出して語る

経験の想起は **再構成** である

⇒経験は想起する場面(再現される文脈)に合わせて再構成される

映像もことばも文章も！



例. 世間話:

姉が妹を殺した事件をめぐる食堂の夫婦の会話

(松山巖『うわさの遠近法』青土社より)

お婆さん 「嫌な話したね、姉の方も狐でもついたんじゃないの？」

お爺さん 「狐じゃなくて男さ、きっと妹の方が男をとっちまったんだ。」

お婆さん 「そうかね、でも妹を殺すかね、取りついたんじゃないの、狐が。」

お爺さん 「おんなぁ怖いよ。」



お婆さん 「男も真面目なのに限ってさ、裏で何や
ってるかわからないもの。」

ひとしきり真面目に見えて悪いやつらが
いたことをあれこれと話し、悪い男の噂
から、いま一度事件に話がもどって、

お爺さん 「いや、妹より男が悪い。」

お婆さん 「やっぱり殺した姉の方がよくない。」

お爺さん・お婆さん 「親御さんたちは悲しいだろう。」



思い出すこと＝再構成

「想起は **再構成** である」(Bartlett, 1932)

経験は再現される文脈に合うように
再構成される。

◎文の伝言ゲーム

◎絵の伝達ゲーム

無意味な絵を2分提示→思い出して描く

→次の人に2分提示→

・・・リレイしていくと・・・

★無意味な絵が有意味化する！

思い出すこと＝再構成の事例

「想起は **再構成** である」(Bartlett, 1932)

経験は再現される文脈に合うように
再構成される。

1. **証言** の信用性

e.g., ウォーターゲート事件, 甲山事件

2. **噂話** の生成と流布

e.g., 豊川信用金庫の取り付けパニック

3. **口承文芸** の変遷

e.g., 伊勢物語, グリム童話



ウォーターゲート事件(テキストpp.179-180)

●米国 ニクソン大統領 1972年

大統領の側近が民主党全国委員会本部の
入っているウォーターゲートビルに盗聴器をし
かけようとして未遂に終わった事件。

●裁判の過程でニクソン自身が隠ぺい工作にかか
わっていたのではないかという疑惑

⇒下院司法委員会で大統領弾劾決議案が可決
ニクソンは疑惑を事実と認め、大統領を辞任



法律顧問ディーンという人物

●事件全体の中心人物

事件のもみ消し工作や事件発覚後はホワイトハウスと捜査当局の連絡役として常に重要な役割を果たす

●「免責保証」

公聴会での証言内容によりワシントン地裁から刑事事件で訴追されることはないという「限定免責の約束」を取り付け、大統領自身が隠ぺい工作に関わっていたと証言。 ⇒ ニクソンは大統領を辞任

ディーンの証言(Neiser, 1981)

[テープ]

N「我々は68年に飛行機上で、それから62年にも盗聴されていた。知っての通りだ。

D「68年の事実の証拠がないのは残念です。前FBI長官(ハント)が知っていたと思いますが」

N「いやそれは違う」

[証言]

D「会話のはじめに、大統領は私に、「ハントが大統領キャンペーンは68年に盗聴されたと言った」と話されました。

そして大統領は、「私たちがそれを明るみに出し、今の問題へ逆襲するのに用いたらよい」と話されました。



証言は欲求・願望により再構成される

[テープ]

D「3か月前には、こんな事件が忘れられるときがきつとくると思いながら苦勞していました。しかし、今ならわたしも54日後の選挙はきつとうまくいくと思います」

N「え？」

D「何もかもうまくいくでしょう」

N「ああ……それにしても君の処理の仕方は巧みだったね。あちこちの漏れ口に指をあててふさいでくれた」

[証言]

D「大統領は私がうまくやったとほめてくれました。そして事件がリディ
(財政顧問)でとまったことを感謝してくれました。私は、お誉めには
及ばないと申しました。またこの時間がおわるのはずっと先だし、
事件が決して明るみにならないとは確信できないと申しました」

子どもの目撃証言の信用性 (甲山事件の証言から)

●4人の子どもの証言:

事件の夜, 保育者の山田さんが悟君を非常口から連れ出すのを「**見た**」.

●犯人特定の決め手となった証言:

1人は事件から15日後, 3人は3年以上後の供述.

●「過去の記憶」=「現在の物語」:

目撃証言は今現在の語りの中に生み出された過去である.

●目撃証言 = 解釈されたものとしての語り:

検察や判事などの前で語られ, 解釈されて初めて目撃証言となる

→聞き手の解釈の構造に依存する.



供述の場→質問を繰り返すという行為

●答えが明らかかな場合は質問を繰り返さない

∵ コミュニケーションを冗長にしないための
ルールが働いているから。

会話の公準 (Grice, 1975) テキストP.79

量の公準 : 必要十分な情報を提供する

質の公準 : 真実を述べる

関係の公準 : 相手の発話に関係づける

様態の公準 : 簡潔で秩序ある表現をする



● **子どものこのルールを理解している。**
大人が質問を繰り返すと、子どもは、

① **「同じように答えてはいけない」とか**
「自分の答が間違っていたのだ」と
考える。

② **質問者の期待を敏感に察知**
大人の期待に応じるように
他の答えを探そうとする。



例：同定の理由は言えない

B 「そしたらね、その人は女の人だったか、男の人だったか？」

C 「女の人」

B 「どうして女の人だとわかった？」

C 「……(約15秒)」

B 「今聞いているのは、最初にきみが女子棟の廊下の入口の境のところで見たと言うたでしょう？二人を見たと言うたな」

C 「はい」

B 「そのときにわかったかどうかということを聞いているんだけどね、そのときに女の人だということがわかったの？」

C 「はい」

B 「それでは、どうして女の人だとわかったんかな」

C 「……(約40秒)」

B 「思い出せへんかな」

C 「……(約10秒)」



例：同一の質問の反復で回答を引き出す

B 「最初の廊下の入口の境のところから見たときその人の顔は見たの？」

C 「……」

B 「最初に見たときだよ」

C 「いいえ、見なかった」

例：択一式クローズド・クエスチョンへと切り替え、一方の選択肢を強制的に選択させる

B 「そのうしろの人とS君との間やけどな、これは体がひつつくぐらいかな？」

C 「……」

S 「ひつつくぐらいかそうでないかですまず教えてください」

C 「……」

B 「体がひつつくぐらいかそうでないかですまず教えてください」

C 「……ひつつくぐらい」



例：回答不能から回答可能へ変更

B 「さっき男子トイレから玄関通って女子棟の方へ行ったと言ってくれたね」

C 「はい」

B 「その時、君が歩いていって、男子棟廊下とか玄関とか女子棟とか、誰かおりましたか？」

C 「いいえ」

B 「女子棟の廊下には誰かいたのかな？」

C 「……(1分15秒)」

B 「質問分かってますね」

C 「はい」

S 「質問わからなかったらもう一度言ってちょうだいと言いなさい」

C 「はい」

B 「女子棟の廊下に誰かいたのかな」

C 「……S君と澤崎先生いた」

B 「それは、君見たわけやね」

C 「はい」



供述の特性

(1)

事件直後の供述では「山田さんが悟君を連れだした」時刻や文脈が異なる。

→日常的な記憶を語った可能性

(2)

繰り返しの事情聴取の中で「殺人事件」の文脈に整合的にマッチするように情報が変容している。

(3)

質問者の 思いこみ が、思いこみを支持する供述を引き出してしまっている。⇔**確認バイアス**



(4)

証言した子どもは知的障害がある。

→ 体験していない虚構を記憶したり, 自分で構成したりできないから「真実」のはずだ, と供述過程の分析を怠っている。

(5)

山田さんの自白; 連日の過酷な状況での取調べに神経がまいってしまった。

弁護人との接見も十分に行えなかった。

→ 無意識のうちにやったと思い込まされ, 虚偽の自白を強要された。

∴ 証言の信用性はきわめて低い!



豊川信用金庫取り付けパニック

1973年12月13日

愛知県豊川信用金庫小坂井町支店

(1)発端： 8日朝

●電車の中の女子高生の会話

(豊川信用金庫に内定したAに)

「信用金庫なんて危ないわよ」

(2)流布：

A

→ B (下宿先の叔母) <電話;悪い「うわさ」>

→ C (兄嫁;8日)

→ D (美容院の女主人;9日)

→ E (親戚の女性「うわさ」)

→ F (小坂井のクリーニング店主が
二人の会話を小耳にはさむ)



(3)小坂井町へ舞台を移し停止; 10日

(4)再燃;13日午前11時半

クリーニング店に電話を借りにきた男

「豊川信用金庫に行ったらすぐ120万円おろすように」
と家人に

→ G (クリーニング店主の妻;

「うわさ」ではなく「真実」と確信)

→ Fは信金から180万円引き出す

→→ FとG; 友人, 知人, 得意先へ

→→ 知人 <アマチュア無線>

→ ハム仲間へ

● デマ流布の心理的基盤;

7年前に中部日本産業(金融機関)の倒産

→ “金融機関は信用できない”



口承文芸の変遷

平安時代の物語の作者は不明。

→ 『源氏物語』も『紫式部日記』がなければ
誰が作者かは不明だったろう。

◆ 作者の名が作品に記されない。

= 作者以外の他人が手を加える余地が
大いにあった。

例. 『伊勢物語』:

一人の作者が作り上げたものではなく、
少なくとも3回以上70年以上にわたって
増補されつつ成長増殖してきたことが
明らかにされている。



根拠

- ◆意味的に重複し、繰り返している部分を一つにまとめる
- ◆挿入句的に**注釈(敷衍的説明)**を加えている。
- ◆**感情のあり方を示す表現**が多くなる。
- ◆文の配置場所を変え、原文よりも**構成が巧妙**になる
- ◆一文が長く複雑になり**情景的描写**が詳細になる。
- ◆原文を尊重するあまり、手を加えず取り込んで一部**文体**が異なってしまう。

片桐洋一(1971)

グリム童話

初版 会話体<個人に語りかける>

- ◆意味的に重複し、繰り返が多い
- ◆矛盾がある

2版 文章体(単文)<不特定多数に伝達>

- ◆挿入句的に注釈(敷衍的説明)を加えている。
- ◆感情のあり方を示す表現が多くなる。

3版 (1) 文章体(文学作品)<読者に読ませる>

(2) 会話体<聞き手に語りかける>

- ◆昔話風の文体・「額縁」(むかしむかし・・・とさ)
- ◆教訓・子どもを意識した改変

(内田, 1986)

メタ的想像力

★メタ【meta】〔化〕

（ギリシア語の「間に」「後に」「超える」の意の meta に由来する接頭語）

→ 想像を「超える」 → 意識対象にする

★ 想像の過程や結果(所産) 対象化・意識化



比較



相対化へ



で終わる。

多田さんは「貴重な歴史的史料ではないのか」と絵巻を買い求め、大阪人権博物館に持ち込んだ。

同じころ、国立歴史民俗博物

の「東京震災録」によると、デマは震災翌日から広がった。

「朝鮮人が放火した」「井戸に毒を入れた」

火の手が各地であがり、被災者が逃げまどうなか、デマは真

虐殺を証言

館（千葉県佐倉市）も、同じ画家による絵巻を東京で開かれた別の古書市で手に入れた。

こちらは全三巻。第三巻の中に、やはり虐殺のシーンが描かれていた。

後ろ手にしばられ、今にも殺されそうな男性。その男性に泣きそうな顔をした子どもがすがりつく。

「証言では知られていた関東大震災での朝鮮人虐殺事件を、これほどリアルに描いた画家はかつてない」と、同博物館の近代史担当の助教授は言う。

約十万人が死亡した関東大震災は、二三年九月一日に起きた。東京市役所（現東京都庁）

実味を帯びて伝わってゆく。自警団をつくった民衆は、棒や日本刀をもち、要所に検問所を設けた。

震災直後に置かれた凶弾の関東戒厳司令部の資料「兵器ヲ使用セル事件調査表」が九七年、東京都公文書館で発見された。東京と千葉で起きた殺人事件計二十件、二百八十一人について、日時や場所が記されている。このうち二百五十四人が朝鮮人で、すべて氏名不詳となっている。

「三日 永代橋付近 川に飛び込むなどした朝鮮人三十二人射殺」

「四日 南行徳村 こん棒などで暴行した朝鮮人五人射殺」
殺害方法は、殴打二百人、射

殺二百一人、刺殺二人

喪失感—語りによる癒し

「何ひとつ変わっていないのに、.. **そのひとだけ**
がいない感じが、どんなものなのか、....
そのさみしさがわかりますか？」

I. 語りのちから = 音声化

paralinguistic cues

II. 感情の冷却作用 (メタ認知)

⇔ 言語化による **対象化・客観化**



死者としての “アイデンティティ”
の受け入れ

青年期の心理臨床支援

“青年の心理的混乱の意味をその青年の物語の
コンテクストから読み取って、青年自身が主体的
に生きられる物語を生成するのを援助する活動”

(下山, 1999, 152頁)

⇒ 人生の物語に介入し、そこに新たな
意味を生成していく過程



授業コメント:3分間作文

“想像力は人間のほとんど全てだと言ってよいくらい
だと思う。事実はそのままではとらえようがないので、
人は想像力によって、それを意味づけ、生活の中に
位置づけていく。

よって、人は想像力を身につけたとき、「人」になると
言えよう。人はそれぞれ**独自のファンタジーを生成し**、
それに沿って**人生を(無意識的に)組み立てる**のかも
しれない。だから、**事実**は想像力によって作られるとも
言えよう”

(心理3年, I.T.さん)



人はなぜ物語るか ⇔「虚構」のちから

羹尚中(東大教授・政治学者)

『母一オモニー』集英社, 2010年

「自分がこの年(59)になり、そして虚構の力を借りたからこそ書けたことがたくさんありました。・・・人間が生きることの重力のようなものをひとつ、示せたような気がしています。」

朝日, 夕刊 2010.6.24.

⇒「虚構」以上の意味が?

物語とは

「物語とは設問の自由と解答の自由の間におこるフレキシブルな解釈の自由をゆるす大脳のシステムにあり、その多様な選択肢は、人間が生きるという行為のなかで描く過去と未来のイメージの創造によって、淘汰され、限定されるものなのであろう。

こうして発生した物語に集団の意志の流れをつくりあげたり、また解体させたりする実効があるのは興味深い。



物語はたしかに作為であり、広い意味での虚偽である。

しかも、この虚偽は、よし虚偽であったとしても、物語を形成した当人によって望まれた解釈であり、それが複数の集団の環境意識のなかで、共有される解釈であるとき、集団を動かす 実効のある虚偽 である。

こうした虚偽は、いわゆる 真偽という尺度によって葬られるような虚偽ではない。 それは大きな価値の選択を迫る機能を果たしている。

この物語効果は、物語を所有した集団の命運を定めるものでさえある。



物語はわれわれの個々の頭脳に内臓された
基本的な思考構造であり、それは人間がひとりで
自然のなかで生きていくだけではなく、複数の
集団として生きていくための行動 をつくりだす。

いわば、了解するところに物語の流布があり、
納得する背景に物語がひそむ のである。」

(高橋秀元 1988「幻想的時空間と物語構造
—世界観共有装置としての物語—」
清水博(監修)『解釈の冒険』NTT出版)



想像力の意義

もし人が古い経験をそのまま再生するなら、過去に向かっていきているにすぎない。

新しい未来に向かって前進し、現状をより高いものへと変えることができるのは、人間の特質である想像力をはたらかせ、以前になかったものをつくりだすという認識のしくみに負っているのである。

(内田 1994)

1Q84

村上春樹 (2009)

オームに走った若者; システム(カルト集団)が主体性や考える力を奪ってしまった

物語はわれわれの魂がシステムに絡めとられないようにする装置

読者は物語を通して各自の道・方途を見つける

⇔ナラティブは個人に考える力を取り戻させ

システムに抵抗できるような 自分自身が

主人公の物語を構築するのだ。(内田,1996)

人はなぜ物語るのか

整合性ある世界の中心に
自分を位置づける

- 素材の取り出し ← 反省的思考
- 曖昧性の削除 ← 類推
- 因果関係 ← 可逆的操作

↓

「意味を求める努力」

↓

まとまりのある解釈

人が語ることの意義

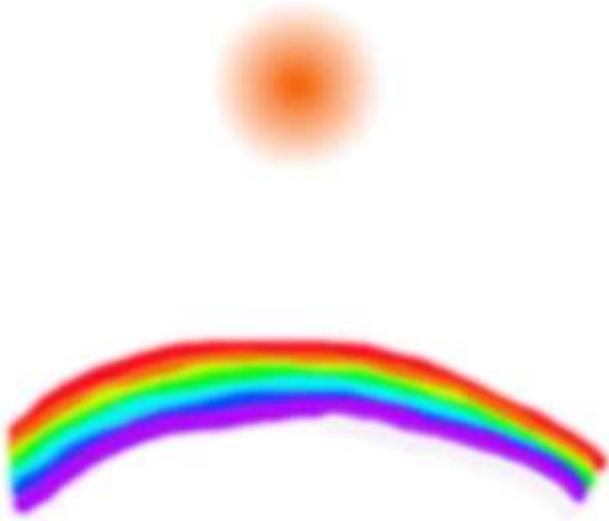
★「意味を求める努力」の顕れ
make sense

個人のレベル： 世界づくりの手段
集団のレベル： 価値体系の生成と共有
= 文化の創造と伝承



自由意志をもつ存在

★メタ的想像力 *C.f.*, 心理3年 水井樹さん



to be continued